

1 3. 黒毛和種去勢肥育牛における早期出荷技術の検討

農林水産研究指導センター畜産研究部・1) 畜産振興課

○藤田和男・内村誠¹⁾

【目的】

飼料・資材が高騰する中、肥育経営では効率化による収益性の確保が喫緊の課題となっており、国は「家畜改良増殖目標 (R2.3)」において肥育月齢を 24~26 か月齢に短縮する早期出荷の実現を掲げている。このため、慣行の 29 か月齢出荷と遜色ない枝肉成績を確保することを第一とした収益性の高い早期出荷を目的として飼料給与体系の検討を行なった。

【方法】

黒毛和種雄子牛 12 頭 (全きょうだい牛, 4 血統各 3 頭) を令和 3 年 9 月に市場から約 3 か月齢 (99.7±8.0 日) で導入し、日齢、体重を考慮し試験区を 4 血統・4 頭×2 群、慣行区を 4 血統・4 頭×1 群に分け育成し、5 か月齢で去勢、6 か月齢から肥育に供した。

慣行区は出荷まで同じ配合飼料を用いたエクセレント体系により肥育した。試験区は同じ配合飼料をベースにバイパスたんぱく飼料等を加え肥育前・中期の CP 充足率を 16~20% (慣行区は同 12~13%) になるよう設計し給与した。

慣行区は 9 か月齢から肥育を開始し 29 か月齢で出荷、試験区は 6 か月齢から肥育を開始し 25 か月齢で出荷した。肥育期間は両区とも 20 か月間であった。

【結果】

体重は試験区を 25 か月齢で出荷するまで各月齢で両区に有意な差は無く推移し、出荷時体重平均は試験区が 790kg (24.6 か月齢)、慣行区が 867kg (28.8 か月齢) であった。

枝肉成績平均は試験区及び慣行区で、枝肉重量が 494.4kg 及び 525.3kg、ロース芯面積が 60.5 cm² 及び 63.5 cm²、ばら厚が 8.6cm 及び 8.6cm、皮下脂肪厚が 2.8cm 及び 3.0cm、歩留基準値が 74.3 及び 74.1、BMS.No が 8.3 及び 9.3 であり、枝肉重量、ロース芯面積及び BMS.No で試験区が慣行区より劣ったが、皮下脂肪厚、歩留基準値は慣行区より良好であり、格付項目の全てで有意差は無かった。

また、締まりの平均は 4.8 及び 4.8、きめの平均は 5.0 及び 4.8 で有意差は無かった。

収益性については出荷時期の違いによる単価差を排除するため各格付単価に年平均単価を用いて計算した結果、枝肉販売価格から飼料費を差し引いた粗収益は 628 千円及び 761 千円となり、試験区が慣行区より 133 千円低かった。

以上、黒毛和種去勢牛を 6 か月齢からたんぱく水準を高めた肥育を行なうことで 25 か月齢での早期出荷の可能性が示唆された。

【今後の取組み】

収益性の高い早期出荷の実現を目指し、令和 6 年度からはロース芯やばら厚の大きい枝肉歩留の良い枝肉を生産する肥育技術の検討を行なう。